武田佐知子氏に聞く――

大阪ルネッサンスのさきがけ

「21世紀懐徳堂」がめざすもの

今年4月、大阪大学（豊中キャンパス）に、『21世紀懐徳堂』がオープンする。懐徳堂は江戸時代に大阪の町人がつくった学問所。福澤諭吉らを生んだ適塾とともに、大阪大学の源流といわれている。その復興に携る同大学理事・副学長の武田佐知子教授（日本古代史）に、大阪人の学問のしかたについて聞いた。

武田 佐知子（たけださちこ）氏
文学博士（東京都立大学・1985年）。大阪外国語大学准教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞受賞（1985年）、紫綬褒章受章（2003年）など。「衣服で読み直す日本史ー男装と王権（朝日新聞社）」ほか著書多数。

大阪大学・吹田キャンパスに

知財を眠らせない

江戸時代の大坂の人々には、金儲けの手段としてではなく、純粋な知的好奇心による学問探究の気概がありました。これが懐徳堂や適塾を生み、近世日本の知財を結集して素晴らしい人材を輩出してきました。21世紀懐徳堂もまた、大阪大学の知財を活用して社会に貢献するものです。地域の方々、自治体、企業などとコラボレーションし、多彩なカルチャー活動を目に見える形で発信すること。そして大阪人が伝統的にもっているセルフラーニングの気運を高めることで、町の活性化に寄与したいと思っています。

具体的な活動としては、豊中キャンパスのイ号館に21世紀懐徳堂をオープンし、各種の市民講座をはじめ、多目的スタジオやギャラリーも備えて、演劇や芸術などさまざまなパフォーマンスを学生も市民も一緒になって創り、かつ鑑賞できるようにしたいと思っています。また、大阪大学には社会貢献の拠点として『中之島センター』があります。21世紀懐徳堂はここも活用し、さらに次の段階として、現在開発中の梅田北ヤードへの進出も考えています。保育施設をつくって若いお母さんやワーカー、定年退職者などが勉強したり、映画や演劇を見たりできるようにしたい。そのように積極的に都心へ打って出ようと、構想を練っているところです。

大阪大学の課題

大阪大学は平成19年に大阪外国語大学と統合して、学生数では日本最大の国立大学になりました。キャンパスは吹田、豊中、箕面にありますが、将来的には中之島センターや北ヤードにも学生を集めたいですね。都心に学生が集まることは、町の活性化にも重要です。そうして知のボルテージを上げることで、大学と町が共に栄える。かつての大阪がそうであったように、今、21世紀懐徳堂を契機として、大阪ルネッサンスを仕掛けていきたいと思っています。

また現在、大阪大学では多くの学部がそれぞれ市民向けの講座を開催しています。中之島センターでも、天神祭に関する講座や上方落語をテーマにした講座など、人気の高い講座が開かれています。しかし、大阪大学全体として、今、どのような講座があるのかが分かりにくい。そこで、阪大で何をしているかすぐ分かるようなポータルサイトを整備する計画があります。また、大阪外大と統合したことで、外国語学部の知財が増えました。これは、阪大の国際的な情報発信力の強化を意味しています。私たちは今、こうした自らのコミュニケーション力を高めることを、非常に重要な課題としています。

大阪人の自信と誇り

21世紀懐徳堂という名には、かつて大阪は学問の都であったことを、懐徳堂を象徴として知ってもらい、大阪をもう一度元気づけたいという願いが込められています。大阪は「たこ焼きとお笑いと儲かりまっか」だなんて、いつ誰が言い出したことなんでしょうか。近世大坂の成熟した大人の文化は、知的好奇心の豊かな町人が育んで来たものなんです。

「難波津に　咲くや木（こ）の花　冬ごもり　今は春べと　咲くや木の花」という歌があります。4世紀末、百済から渡来した王仁の作だといわれていますが、それが歌い継がれ、7世紀ごろには日本中で手習いの手本にされていたことが、各地で出土した木簡で明らかになっています。これってすごいことですよ。大阪は古代にはすでに国際港湾都市として有名で、現在の中之島の近くには難波館（なにわのむろつみ）と呼ばれる外交使節の客館がありました。このように大阪には古い歴史と学びの文化があるのだということを再認識し、大阪人の自信と誇りを取り戻してほしいですね。21世紀懐徳堂もその一助として、市民と大阪大学の知財をつなぐ媒介になりたいと思っています（談）。